

「^{わたし}私たちのちかい」の味^{あじ}わい

はじめに

4

「私たちのちかい」についての親教

8

「私たちのちかい」の味わい

釈
徹宗

14

■ 「自分の殻」とは

16

■ むざぼり・いかり・おろかさ

20

■ 喜びや悲しみを分かち合う

24

■ 気づきとつとめ

28

■ 日常の中にある道

30

はじめに

二〇一四（平成二六）年六月、大谷光淳さまが、浄土真宗本願寺派第二十五代門主・本願寺住職にご就任されました。これを受け、二〇一六（平成二八）年十月一日から翌年五月三十一日まで、京都の本願寺では、み教えが伝わっていくことをみんなでお慶びする「伝灯奉告法要」がつとめられました。

この法要の初日、ご親教（ご法話）に立たれた大谷光淳（専如）ご門主さまは、ご自身の思いを「念仏者の生き方」と題してお示しになりました。

さらに、二〇一八（平成三〇）年十一月二十三日、ご門主さまは、「全国門徒総追悼法要・秋の法要」において、より広く「念仏者の生き方」のこころをお伝えするため、その肝要を短く簡潔な四力条の言葉にまとめてお示しくださいました。それが「私たちのちかい」です。

本書は、この「私たちのちかい」を、一人ひとりがそ

れぞれに、自らのこととして、つねに身近に感じていた
 だきたいという願いから発行しました。解説は、本願寺
かんけいがっこう
 関係学校である相愛大学教授の釈徹宗先生にお願いし
 ています。釈先生は、教育現場にとどまらず、テレビや
 雑誌などでも活躍されていて、若い世代の人びとに響く
 言葉で仏教のこころを伝えるとともに、現代社会を生き
 るために大切な仏教の考え方や見方について、広く深く
 発信されています。今回、「私たちのちかい」とともに、
 日常の中で仏道ぶつどうを歩んでいくというメッセージをいただ
 きました。

「私たちのちかい」は、誰もが言いやすく覚えやすい
 ちかいです。繰り返し声に出し、受けとめていく中で、
 一人ひとりがそれぞれに、念仏者ねんぶつしゃとしてどのよう
 に生きていけばよいのか、自らに問いかけてまいりましょ
 う。

また、「念仏者の生き方」につきましても、冊子『念
ぶつしゃ
 仏者の生き方』かたに学ぶ』まな（本願寺出版社）を発行してい
 ます。ぜひあわせてお読みください。

本願寺出版社

「私たちのちかい」についての親教

私は伝灯奉告法要の初日に「念仏者の生き方」と題して、大智大悲からなる阿弥陀如来のお心をいただいた私たちが、この現実社会でどのように生きていくのかということについて、詳しく述べさせていただきました。このたび「念仏者の生き方」を皆様により親しみ、理解していただきたいという思いから、その肝要を「私たちのちかい」として次の四カ条にまとめました。

わたし
私たちのちかい

一、^{ひとつ}自分の殻^{から}に閉じこもることなく

穏やかな顔^{かお}と優しい言葉^{ことば}を大切^{たいせつ}にします

微笑^{ほほえ}み語りかける仏さまのように

一、^{ひとつ}むさぼり、いかり、おろかさに流^{なが}されず

しなやかな心^{こころ}と振^ふる舞^まいを心^{こころ}がけます

心^{こころ}安らかな仏^{ほとけ}さまのように

一、^{ひとつ}自分^{じぶん}だけを大事^{だいじ}にすることなく

人と喜^{よろこ}びや悲^{かな}しみを分^わかち合^あいます

慈悲^{じひ}に満^みちみちた仏^{ほとけ}さまのように

一、^{ひとつ}生^いかされていることに気^きづき

日々^{ひび}に精^{せい}一杯^{いっぱい}つとめます

人^{ひと}びとの救^{すく}いに尽^つくす仏^{ほとけ}さまのように

この「私たちのちかい」は、特に若い人の宗教離れが盛んに言われております今日、中学生や高校生、大学生をはじめとして、これまで仏教や浄土真宗のみ教えにあまり親しみのなかった方々にも、さまざまな機会で唱和していただきたいと思っております。そして、先人の方々が大切に受け継いでこられた浄土真宗のみ教えを、これからも広く伝えていくことが後に続く私

たちの使命であることを心に刻み、お念仏申す道を歩んでまいりましょう。

二〇一八（平成三十）年十一月二十三日

浄土真宗本願寺派門主 大谷光淳

「^{わたし}私たちのちかい」の味^{あじ}わい

釈^{しゃく}

徹^{てつ}
宗^{しゅう}

このたび大谷光淳^ご門主より「私たちのちかい」という生活規範が発表されました。中学生にもわかる指針を^ぐというコンセプトとのことです。そこで「私たちのちかい」が何を語ろうとしているのか、耳を澄ましてみました。

「自分の殻」とは

一、自分の殻に閉じこもることなく

穏やかな顔と優しい言葉を大切にします
微笑み語りかける仏さまのように

「私たちのちかい」の1つ目に「自分の殻に閉じこもることなく」とあります。〴〵自分の殻とは、自分の都合であり、かたくなさであり、自分を守るバリアでしょう。私たちはいつも自分を守るためにバリアを張っています。バリアを張らないと、傷ついてばかりです。殻に閉じこもらざる

を得ないこともしばしばです。でも、ずっとバリアを張っていると守ってきた〴〵自分〴〵ばかりが大きくなり、時には〴〵自分〴〵が暴れて手がつけられなくなることも起こります。殻がないと苦しい、殻があっても苦しい、本当に人間ってやつかいです。

そんな私を殻ごと照らす仏さまの光があります。その光に触れると、身も心も柔軟になります。それは、教えに導かれるうちに、「ああ、なんと自分がかたくなであったのか」と気づかされるということなのでしょう。

仏教の教えと出会うことで、自分の殻の意味も変わってくるのではないのでしょうか。いっぱいトゲが突き出ていて近づくこともできない殻もあれば、仏さまの光に照らされた柔らかかそうな殻もあると思います。私たちが

大切にする『無量寿経』というお経には「和顔愛語」と出てきます。穏やかな顔と優しい言葉を大切にし、そしてまず他者の思いを受けとめましょう、といった意味です。

この教えを大切にしていると、いつの間にかバリアが下がって、目の前にいる人の心と自分の心との共振現象が起こるかもしれません。

